

平成 23 年 12 月 10 日

石坂会（輪読会）報告資料

大久保啓次郎

福澤研究センターと私（石坂先生） 1982 年「OB 諸君に」

1983 年(慶應義塾創立 125 年)に記念行事の一環として「福澤研究センター」の設置が決まった。

[入試問題漏洩事件] →[石坂先生を福澤先生に関心を向けさせる動機]
石坂先生は、日夜福澤先生の著述にふれて、「目からウロコが落ちた。」

[慶應義塾内部に福澤研究者がいない] →[中井教授&島崎教授が福澤共同研究を提案]=[石坂先生の福澤先生への思いと一致]

石坂先生の提案→福澤諭吉の研究を近代日本における歴史的位置づけにする事、近代日本の文化史的研究の裾野を広げる研究にする事。→諸先生方の賛同を得。

河北、内山、飯田の諸教授を中心に十数名の研究者による共同研究チームが作られ、今日まで研究が続けられている。→福澤研究センター設置運動の主体。

研究の結果明白になった事 →①地方での塾員の活動が多方面に亘り活発である事、②福澤先生や門下生に関する資料の蒐集、整理の体制が不備である事。

②の一例としての塾史資料室 →事務機構の一部でしかなく予算も限度あり。
→このことが「福澤研究センター」設置への運動を駆り立てた。

福澤研究センター設立について 1982 年 5 月「三田評論」

今まで『全集』は、戦前、戦後を通して、4 回編纂されている。

1. 1898 年（明治 31 年）・福澤諭吉編纂の明治版『福澤全集』
2. 1925 年（大正 14 年）・石川幹明編纂の大正版『福澤全集』
3. 1933 年（昭和 8 年）・石川幹明編纂の昭和版『続福澤全集』
4. 1958 年（昭和 33 年）・富田正文編纂の現行版『福澤諭吉全集』21 巻

このようにその人の業績が繰り返し出版された事例は、鴎外、漱石といった作家を除けば福澤諭吉ただ一人である。それぞれの時代局面に応じ、様々に評価され論議の対象となっているのも、福澤諭吉の思想的多面性を物語っている。

発足する福澤研究センターの第一の課題は、国の内外で正当に評価されうる福澤研究を、塾内から生み出す基盤作り、でなければならない。

塾史資料室＝塾内外の福澤研究者が利用しうる場所。(理想)

塾史資料室 →創立百年記念事業として百年史を編纂するために設けられ塾史編纂所で、研究調査組織ではなく、塾監局管轄下の事務機構の一部。(現実)

したがって、福澤研究センター設立に当たって、最初に取り組みねばならぬ事は、これまでの **塾史資料室** を福澤研究センターに吸収し、その塾史編纂の仕事を引き継ぐとともに、研究調査機関として改組することが必要である。

福澤研究センター設立に当たっての石坂先生の要望事項

1. センターの運営は研究スタッフを中心に行う。
研究スタッフには、直接の福澤研究者だけでなく、専門領域を別に持つ兼任の福澤研究者の参加も求めなければならない。
さらに、広い角度からの研究のためには、外部からの訪問研究員制度も設けなければならない。塾内外の研究者たちによる研究交換、共同研究の積極的な場にしたい。
2. 調査研究の方向も、福澤諭吉個人に限定してはならない。塾出身者の社会各方面での活動の考察にまで広げなければならない。
3. 福澤諭吉から発した慶應義塾の歴史は、「学校史」の域に留まるのではなく、学問研究、教育、政治、経済、出版、新聞、医療、福祉、など様々な分野で、そして中央、地方を問わず活動した塾員たちの活動もまた、慶應義塾の歴史でなくてはならない。そこまで及んで初めて、近代日本における福澤諭吉と慶應義塾の果たした歴史的役割が正しく位置づけられる。それを踏まえてこそ、伝統を受け継ぎながら明日の社会に我々が何をなすべきかの未来の展望が開ける。

福澤研究センターの課題

1. 資料や研究成果の活用。
2. 新入生対象の「福澤講座」(近代日本文化史的講座)の開設。
3. 福澤研究センター内部からの研究者育成。
4. 塾外の「社団法人福澤諭吉協会」とも協力し福澤研究の両輪となる。

福澤研究センターあれこれ 1983 年（昭和 58 年）5 月「塾」

～石坂 巖所長に聴く～（インタビュアー：近藤紀孝）

質問 1．設立の目的は？

福澤記念館でなくて福澤研究センターとしたところに意味がある。
これをきっかけに福澤先生思想活動を改めて顧み、我々が飛躍を試みる、その基礎作りである。人類史的に言えば 21 世紀にこれから向かうわけである。
そういうところで、我々の役割は何かを考える、慶應義塾、さらに人類社会を発展させるという活動作りが福澤研究センターであると考えてる。

質問 2．センターとしての具体的活動方針は？

福澤先生に関する原資料が沢山あるが全く整理されていない状況である。先ずはそれらの資料の整理・研究をやらなくてはならない。
そういう整理の上で、日本の近代化の中における福澤諭吉や塾員の役割は何であったかも研究しなければならない。
又福澤諭吉や塾員の活動に関する講座や、外部に向けての講演会もやらなくてはならない。
結局初年度は、活動のルール作りであると考えてる。

質問 3．資料の整理と並行して、早く塾内に福澤研究についての講座を開設して頂きたいが・・・。

福澤先生についての研究する人が少なくなっていて、講座を開設出来ない。
したがって、福澤研究センターでやるべき事の一つとして、塾内の福澤研究の専門家をこれから育てていくこともセンターの大切な仕事と考える。
福澤先生や塾員の活動についても、その活動が近代日本文化においてどういう役割をしたかという講座を、出来るだけ早く提供したい。

質問 4．福澤諭吉研究の学術的意味は？

福澤先生及び福澤先生の教えを受けた人たちの活動をきちんと位置付けをするということは、我々の生活の特質を明らかにするという意味で非常に重要である。きちんと近代日本文化の特質を把握することは経済大国としての日本の今

後を考える上で大切である。福澤先生並びに塾員なり、慶應義塾の活動をきちんと研究するということは、学問的にも大変大きな意義がある。

質問 5. 福澤研究センターの人員構成及び予算は？

組織機構としては、所長、副所長、運営委員。

運営委員は、各学部長と大学院の社会学研究科の委員長。それと各学部から、理工学部、医学部を含めて 1～2 名ずつ委員を選出。彼等によって運営委員会が設立される。運営委員会は福澤研究センターの重要な方針を決定する。

運営委員会の下に、福澤研究センターの現実の活動をするための委員会として、福澤研究センター会議がある。それは各部から選ばれた運営委員によって構成される。

尚、実際の事務的な仕事は、センターの事務長と事務長の下に男性一人、女性二人の職員がいる。以上が人員構成である。

予算は、基金が別個に五千万円あり、年間予算は人件費を除いて約 8 百万円。8 百万円の内 3 百 1 0 万円が図書資料費、約 2 百万円が「紀要」他の必要な印刷製本費である。(1983 年度=昭和 58 年度)

それと、塾史資料室が予算年間 2 百万円の時に、事務の職員が 4 人である。

そのうちの室長は文書部長兼務なので、実質は 3 人である。

質問 6. 福澤研究センターの意義や方向づけから見ると、従来の塾史資料室の延長のような捉え方というのは奇異に感じるが如何？

その通りで塾内の方々には我々の活動を通じて理解を深めて頂かねばならない。

質問 7. 貴重な資料の保存費用だけでも予算のアップは出来ないのか？

今まで手付かずであったためどのくらい費用がかかるか見当がつかない。

質問 8. 福澤研究センターと海外との学術的な関係は？

残念ながら『福翁自伝』以外の文献は外国に紹介するというような点での努力が慶應義塾としては不足していた。そういう意味で目を外に向けて福澤研究を進めていきたい。塾外の人との共同研究も進める。

そういう意味で研究センターには外部からの訪問研究員、研究嘱託、あるいは客員署員を置ける規定になっている。